

日本語と中国語における 「金銭」に関する諺対照比較研究 2

銭 清
浮 田 三 郎

1 はじめに

一般に、言語表現から、その言語を使用する民族集団の文化の特色を見て取ることができる。特に、日常生活の中から生まれ、民衆の智慧の結晶として使われてきた諺は、各民族それぞれの伝統的な物の見方・考え方を濃厚に反映している。金銭に関しては古来多くの諺、格言が伝えられている。これらの諺には、多年にわたる人々の生活の姿や考え方が示されており、金銭に関して多くのことが言われているのは、人々の生活と金銭との深い関わりを示すものにほかならない。また、金子は金銭の諺に関して、「人間が物質的、経済的な力から離れて生活できない限り、金の威力は実に大きい。金は物質的、経済的力の手形だからである。」(1983a, p.203) と述べている。日中両国語には、そうした様々な「金銭」に関する諺を見ることができる。

そこで、本稿では、「金銭」が使われている両国の諺に着目して、諺に見られる共通点と相違点を明らかにし、日本と中国の風俗、文化、民衆の考え方を考察する。

2 分析資料と方法

本研究の対象として取り扱うのは、日中両言語における「金銭」に関する諺である。

日本の諺の用例は『故事俗信諺大辞典』(小学館 1982)を資料母体とした。『日本の諺 評論』(金子 1983)は比較的によく使用される日本語の基本的な諺として参考にした。

『故事俗信諺大辞典』(小学館 1982)はいろいろな由来を持つ諺や俗説など約43,000項目が収められている。様々な成り立ちの表現を、文献、資料として記録し、専門辞典としてこれまで見られない規模となっている。

一方、中国の諺は、『中国諺語大全』(温 2004)と『諺語大典』(張 2004)の資料を中心に、諺の用例を取り出した。『中国諺語大全』は、約100,000項目の諺を収録している。古今の文学作品からの用例や古代文献及び方言からの引用もされており、内容的にも、詳しい例文を加え、難解の語彙についても解釈が付いている。また『諺語大典』は、内容としては、46テーマ、308項目に細かく分類され、中国語の諺への理解もいっそう深まるように作られている。

考察方法としては、上述の諺辞典から「金銭」に関する諺を取り上げそれぞれの諺の意味内容と表現を対照比較する。両国の諺を対照しやすくするために、日本語の諺には「J」、中国の諺には「C」という符号をつけ、筆者の直訳を付す。本稿では、金の儲け方と金の溜め方及び金の使い方をめぐり、日本語と中国語の諺の対照比較を試みる。

3 金の儲け方

3-1 悪銭に手を出してはいけない

儲けるというのは、働いたりお金を動かしたりした結果として、必要な経費を差し引いて、なお何か有用なものをあとに残すことである。『新明解国語辞典』: p.1146)

お金を儲けるには、働かなくてはならないのであり、自分の腕で稼ぐべきで、悪銭に手を出してはいけないのである。次の諺に、そういった内容が込められている。

(日) J1. 金の中から目見出す

J2. 悪銭身につかず

(中) C1. 来的不明 去的黑

不詳で得た金は、行方不明

C2. 钱没有好来、就没有好花

正しい筋道で得た金でないと、使う時は平気でいられない

C3. 不义之财如汤泼雪

不義の財はお湯を雪にぶっかけるようなもの

C4. 有道之钱方可取、无道之钱莫强求

有道の錢こそ取るべし、無道の錢は強いて求むなかれ

C5. 生意钱三十年、血汗钱万万年

商売の金は三十年、汗水たらした金は万万年

C6. 冤枉钱过不得年、气力钱万万年

よこしま錢は年越せず、苦勞した錢は万万年

C7. 刻薄成家理无久亨

非道に家を成せば、道理として久しく享受せず

以上の諺はいずれも金銭は正しい方法で得るべきだという戒めである。J1 は、不正な手段で得た金は、金のほうから持ち主をにらみつけるという意味である。J2 は、不正な手段で得た金銭はつまらないことに使われがちで、結局はすぐになくなってしまい、残らないものである。

一方、中国の諺では、C2 の「好来」と「好花」の二つの言葉、「好来」は正しい筋道で入ってくるという意味で、「好花」は正しく使うという意味である。このように、錢はまともに入ってこなければ、まともに使えないことを表している。C7 も同様な内容である。C3 は「汤泼雪」を使用し、水中に浸した雪の塊りのように、すぐに溶けて消えてしまうが、

苦勞して得た金は大事にするから、いつまでもなくなならないことを比喩的に示唆している。その他同様な内容のものは、C4、C5、C6 のようなものがある。

3-2 辛抱は金

働くには、肉体労働と頭脳労働がある。いずれにせよ、苦勞という代償を払わなければ何も収穫できない。つまり、辛抱しなければ、儲からないのである。

- (日) J3. 箱根は山だ、辛抱は金だ
- J4. 堪忍家督 短気は損気 辛抱は金
- J5. 石臼石でも心棒は金だ
- J6. 辛抱する木に金が生じる
- J7. 辛抱は金

J3 は、箱根が山であるのと同じように、我慢して辛抱を続けることが将来の利益になることも間違いないと言っている。また、忍耐強く、辛抱強く生活することが、家を保つためには大切で、短気を避けなければならない (J4)。J5 は、「心棒」に「辛抱」をかけて、忍耐しなければ金持ちにはなれないことを表している。J6 は、「木に金が生じる」という比喩表現を用い、現実には木に金を生じるはずはなからうが、常識的には不可能な比喩を持ってきて誇張することによって、並の手段では不可能なことまで可能にする、むだ働きと思わず、じっとがまんして働いていると、いつの間にか金がたまると印象づけている。

以上、日本語の諺は、使いたいのを辛抱してためる、なまけたいのを辛抱して働く、そうすれば金持ちになれることを強調している。一方、今回の資料の中に、このような内容の中国語の対応例が見られなかった。

3-3 資本の必要性

お金を儲けるためには資本の必要性を表す諺もある。

- (日) J8. 金が金を呼ぶ
- J9. 金は招くところに集まる
- J10. 金が子 (利子) を呼ぶ
- J11. 金が共寄りする
- J12. 富に経業なし、利は元にあり
- (中) C8. 钱归大处、水归洼处
 錢は大所に歸し、水は窪みに歸す
- C9. 大网捞大鱼
 大きい網が大きな魚を捕る
- C10. 小钱不去、大钱不来
 小さい錢が出ていかないと、大きい錢は入ってこない
- C11. 水往下流、财往多处
 水は下に流れる、金は財の多い所に集まる

J8 は金を儲けるのに必要なのは人の才能や努力ではなくて、何よりももとでとなるべき金

そのものなのだということである。金が利益を生み出し、その利益がさらに利益を生んで金が次々に増えていくのを表している。J10の「子」は、利子の意味である。金は、得ようと求め欲する者のところに集まるもの（J11）なので、金銭は次々と利子がついてふえていくわけである（J10）。J11は「金が金を儲ける」とも言う。J12の「経業」は、ある定まった仕事である。富を得る方法には、特定の業というものはなく、富は才能のある者のところにおのずから集まるということである。

庶民的な感覚からすると、何もたっぶり金のあるところにさらに金が集まる必要ないと思っても、実際、世の中は金持ちがますます儲かるようにできている。考えてみれば、金持ちというのは単に金を持っているだけでは不十分で、ある程度構造的に利潤が蓄積される位置を占めなくては長続きしないし、一般的に資本規模が大きいほど商取り引きは有利だから、金持ちに富が集中しやすいことは確かであろう（C9）。こうした富の集中現象は、水や雨が水のたっぶりとある川や海にさらに注ぐことを連想させるようで、上に挙げたC8、C11のような例が見られる。水は低い窪地に自然に集まるものだが、それと同じように、金銭財富もまた大資本が営む企業に集まるものである。C10は呼ぶ水をやることの大切さを暗示している。このように、資本（労働力とお金）を投下しないと、儲からないことが表現されている。

3-4 損をすることは得になる

(日) J13. 損は儲けのはじめ

J14. 損して得とれ

J15. 損せぬ人に儲けなし

J16. 危ないところに銭あるぞ

(中) C12. 吃亏时节、便宜在

損するときに儲けあり

C13. 不去小利、则大利不得

小さい利を捨てないと、大きい利は得られない

日本語の諺 J13~J15 には、次のような考え方が見られる。商売の基本は、はじめは損をしておいて、将来のより大きな利益を考えることにあるから、損をすることはもうけること、すなわち、商売のはじめである。損失を恐れては、大もうけはできない。裏を返せば、商売で儲けようと思ったら、ある程度の損は覚悟しなければならないということにもなる。この考え方は、C12 にも見られる。更に、J16 のように時には銭は危険を冒してはじめて手に入れられるものである。

日本語の諺にも、中国語の諺にも、害の中に利を見、損の中に得を見するというものを二面的に捉えるという考え方が見られる。C12の「吃亏」は損をすること、「便宜」はうまいこと、即ち、甘い汁のことである。損せぬ者にもうけないという意味を表している。このように、目の前の利得にあまり左右されることなく、長い目で判断を下すことが肝要だと教えている。

3-5 金を儲けることはつらい

前節でも見たように、金を儲けるには、苦勞をする、資本が必要などという認識を指摘していた。要するに、金を儲けることは容易なことではなく、つらいことである。

(日) J17. 金儲けと死に病いに易いことなし

(中) C14. 用钱容易赚钱难

錢を使うのは容易で、稼ぐのは難しい

C15. 挣来如登山、用时如下滩

錢を稼ぐのは山を登るようで、使う時は砂浜に入るよう

C16. 赚钱犹如针挑土、用钱犹如水推沙

錢を稼ぐには針で土を掘るようで、錢を使う時は水で砂を押し流すよう

C17. 钱难挣、药难吃

錢を稼ぐのは難しい、薬を飲むのは苦い

以上の諺は、金もうけの難しいことをいうものである。J17 は、金儲けも死病と同じように苦しく大変なものなのであり、金儲けと一口に言っても、それは容易なことではないのである。一方、中国語の諺には、対立する語句を用いて表現するものが多く見られる。たとえば、C14、C16の「用钱」と「赚钱」を使い、金儲けの難しさを言い、さらにC15～C17では、対立する意味の対句を用いてその効果を高めている。

4 金の溜め方

4-1 「ちりも積もれば山となる」型

さて、金の溜め方といえば、まず挙げられるのは、ちりも積もれば山となる型である。これも、日中両国の人々が持っている共通点であるが、その比喩のしかたはまったく違う。

(日) J18. 一日一錢百日百錢

J19. 一文錢も小判の端

J20. 千金は一文錢の集まり

J21. 一文から百貫目

J22. 一文惜しみの手前よし

J18～J22の「一錢」、「一文」、「一文錢」は同じものである。昔の通貨の最下位の単位で、千枚で一貫になる。「小判」、「一貫」、「千金」いずれも大金の比喩である。小判は江戸時代に使われた貨幣である。わずかずつでも、こつこつと溜めていけば、いずれは莫大な金額になることをいうのである。

しかし、金のない人にとって、千金という額までためてゆくことは大変難しいことである。金がない時こそ、金の重要さを覚える。だから、わずかなお金でも軽んじてはいけなさと諺が教えてくれる。

一方、中国の諺には、以下のようなものがある。

(中) C18. 拾芝麻湊斗

ごまを拾って一斗升になる

C19. 检鸡毛湊掸子

鳥の羽を集めてはたきを作れる

C20. 糖水熬久变膏 金钱积少成多

砂糖の水を長く煮ると固まり、金はこつこつためると多くなる

何万個のごまを集めれば一斗升になる (C18)。一本のはたきをを作るには、何百本の鳥の羽を使う (C19)。砂糖の水を長く煮るとやがて濃くなる (C20)。それぞれの諺から、こつこつと節約勤儉している人間の姿を思い浮かべることができる。表現の上から見ると、日本語では「一文銭」という直接的な比喻を使用しているが、中国語の諺では、「ごま」、「斗升」、「にわたりの羽」、「砂糖」など、直接「金」とは関係のないわれわれの生活において、すぐ身近なものを比喻の材料として使用していることは興味深い対照である。

4-2 「三欠く」型

そして、「ちりも積もれば山となる型」と違い、肉親の情までたちきる型もある。

(日) J23. 利息をとるより利息をはらうな

J24. 金は三欠くに溜まる

J25. 金は不浄に集まる

(中) C21. 黑手起家、无本万利

不正の手段で事業をやり始めると、資本も必要なく巨利を占める

C22. 人要发迹、良心撤出

人は立身出世したいなら、良心を捨てよう

J23 は、人に金を貸して利息を取ることを考えるよりは、人から金を借りないですむ堅実な生活を心がけよということである。J24 は肉親の情まで断ち切る型の典型的な例である。「三欠く」とは、義理を欠く、人情を欠く、交際を欠くの三つである。世間並みにしていたのでは、金銭を溜めることはたしかに難しいのである。人としてなすべき義理、人情、交際の三つのもを欠いてこそ初めて金銭はたまる。「普通の人の考えでは、義理、人情、交際の三つを熱心にやることが商売上の信用や人脈の拡大にも繋がるというので、必要以上にこれらに力をいれ、金儲けという目的を見失ってしまうこともある。こういう人は本当に金儲けがしたいというよりも、格好をつけるのが好きなだけなのかもしれない。金儲けという目的のためには、他のすべてを犠牲にするくらいの覚悟が必要だというのが、この三つの『三欠く』のすすめであろう。」と竹内 (1999.p138) も述べている。また、金は、品位、性行のいやしものところにかえって集まるのである (J25)。中国の諺にも、日本と同様な考え方があらわれている。つまり、義理、人情などを捨てなければ、金銭はたまらない。

4-3 節約が大切

次のような諺が節約のヒントを教えてくれる。

(日) J26. 富は節檢より來たる

J27. 利を思ふより費を省け

(中) C23. 会賺錢不如会省錢

もうけ上手より始末上手

これはいずれも金は増やすというよりも「使わないことによって貯める」ものだと教えている。だから、「無駄遣いするな」、「儉約せよ」、「贅沢をするな」が蓄財の王道として盛んに推奨される。

5 金の使い方

5-1 金の有効な使い方

さて、消費に関する諺を見よう。まず、中国語の諺に関して言えば、使うべきときはお金を惜しまずに使うという考え方が強いようである。

(中) C24. 有钱就花、死了白搭

金があると使うべき、死んだら何もならない

C25. 钱是用的、水是流的

金は使うもの、水は流れるもの

C26. 当俭要俭 当花要花

金は節約すべきところは節約、使うべきところは使う

C27. 钱是周转流 不花不会赚

金は回るもの、使わないと稼げない

(日) J28. 金は天下の回りもの

一見して、いかにも楽観的である。お金というのは、先に述べたが、人間が交換行為を行う際、使われる仲介物である。言い換えれば、人間に使われるのが、お金の役割である。ただ所有していても、使わなければ、鉱物の一種にすぎないのである。以上の諺はそのような本来の通貨としての金の考え方を表明している。

5-2 けちん坊の姿

節約しすぎると、けちん坊になりがちなのである。つまり、節約とけちは紙一重の違いなのである。

(日) J29 一文の錢を二文にも使う

J30. 一文錢を割ってつかう

J31. 金持ち金を使わず

(中) C28. 珍珠藏到变到老鼠屎

真珠を使わずに隠して、結局ねずみのくそとなる

C29. 拿着银碗讨饭吃

銀碗を持っているのに、乞食をする

J29 はまさにけちん坊のたとえである。J30 は、一文銭を割って使うようなひどいけちん坊の様子を描写している。J31 は金持ちほど金を惜しがって使わないのである。とかく金持ちはしまりやで、けちな者だということである。J31 に対して中国語の諺には、更に、面白い比喻表現が見られる。C28 の「珍珠」と C29 の「銀碗」はいずれも大金の比喻である。金があるのに、使わなければ、結局「くそになる」あるいは「乞食をする」ことになり、何の役にも立たないことを表現している。

5-3 浪費家の姿

逆に、金を不必要な事に使うと浪費になる。

(日) J32. 金無き者は金を使う

J33. 百文儲けの二百遣い

J34. 一文儲けの百使い

J35. 金を糠のように思う

J36. 金を湯水のように使う

J37. 江戸者のうまれ損い金を溜め

(中) C30. 挥金如土、用钱如水

土のように金をばらまく、湯水のように金を使う

C31. 钱紧、卖了堂前地

金にとぼしいと、母屋前の土地さえ売る

C32. 卖孩子的钱都敢用

子供を売る金でもあえて使う

C33. 大花用、一世穷

浪費したら、一世貧乏

前述と全く違い、金持ちは一銭惜しみをしてけちであるのに、金のないものに限って浪費に走るものである (J32)。また、得るところ少なく失うところの多いたとえとしては、J33、J34 のような諺がある。J34 は「一文の儲けの百失い」ともいうのである。J37 の由来は古川柳である。「宵越しの銭は持たぬ」と言って、得た金はその日のうちに使ってしまうのが江戸っ子の美德とされていたので、金を溜めるという行為を江戸っ子にはあるまじきこととしてさげすんで言った。日本の諺は、浪費の仕方を描いているが、浪費の悪結果を強調していないようである。

それに対し、中国の諺は、浪費をすれば、土地どころか、自分の子供さえ売る窮境に追いつめられる恐れがあると警告している。

5-4 金を使う規範

では、どうすればけちと浪費に傾かないのであろうか。諺は具体的なやり方を教えてくれるわけではないが、原則としての方向性は示している。つまり、①所有している量を越えないこと②節約のこと、③慎んでお金をもっとも有効に使うことなどである。

(日) J38. 金は惜しんで使え

J39. 錢一文を主親の如く思え

(中) C34. 如何用銀錢、 当与袋商量

どうやって金を使うか 財布と相談すべきだ

C35. 花錢花在刀口上

金銭は肝心なところに使う

J38 は、金は、あると思っても使えばすぐなくなるものだから、惜しんで大事に使うがよいと表している。J39 は、錢を自分の主人や親のように思い一文でもおろそかにしてはならないという意味である。以上の諺は、常に儉約を心がけよということを強調している。

基本的に、日本語の諺にも中国語のそれと同じく、「金は大切に使う」という考え方を読み取ることができる。使うのはいいけれども、どのように使うかよく考えて、本当に必要な所に使わなければならないのである。

6 終わりに

金銭に関する諺に見られる中国と日本の両民族の考え方を、大まかに分けて検討したが、それを、次のように、簡単にまとめてみる。

6-1 「類似点」

- ① 金の儲けに関しては、日中両国の人々は、金銭は正しい方法で得るべきだという戒めにおいては一致していることが見られる。
- ② 金を儲けるには、苦勞をするものである。つまり、騙したり、たかったりではなく、額に汗し、努力して得た錢はいつまでも大切に作るから、減りにくい。良錢は大切にされるが、悪錢は粗末に扱われる。
- ③ また、資本の必要性について、金を儲けるのに必要なのは人の才能や努力ではなく、何よりももとでとなるべき金そのものなのだということである。金が利益を生み出し、その利益がさらに利益を生んで金が次々に増えていく。
- ④ そのほか、「損をすることは得になる」の節から、両国語の諺とも、害の中に利を見、損の中に得を見ているのは、物事を二面的あるいは多面的に捉える考え方の現れである。
- ⑤ 金の溜め方への言及では、日中双方の諺とも貯蓄に関する意識があることが見られる。具体的な金の溜め方としては、「ちりも積もれば山」型と「三欠く」型が一致している。
- ⑥ 金の使い方に関しては、日本の諺と中国の諺と同じく、金は大切に使うのがいいという考え方を読み取ることができる。使うのはいいけれども、金を自分の親のように思い、惜しんで使わなければならないのを強調している。

6-2 「相違点」

- ① 日本語の諺の「辛抱は金」は、即ち、使いたいのを辛抱してためる、なまけたいのを辛

抱して働く、そうすれば金持ちになれることを強調している。一方、今回の資料の中には、中国語の対応例が見られなかった。

- ② 具体的な金の溜め方の比喻表現としては、日本の諺には、数字が多く使われ、たとえば「一文」、「一銭」、「一文銭」など直接的な比喻が多く、中国の諺には、庶民の生活の身近なものが比喻表現に用いられている。
- ③ 浪費に関しては、日本の諺は、浪費の仕方を描いているが、中国の諺は浪費の悪結果を強調しているようである。

今回の資料では完璧とは言えないが、相当の諺を検討することができた。このように、日中の人々の「金」に関する考え方には多くの共通点が見られる。このような考え方はギリシアの諺にも見られる (cf, 浮田, 2005) が、いくつかの考え方あるいは比喻の仕方には興味ある違いが見られた。

【参考文献】

- 井原西鶴 (1957) 『西鶴集 下』岩波書店
- 浮田三郎 (2002) 「日本語と現代ギリシア語における「友」に関する諺対照比較」『言語学論集』
溪水社 121-135
- 浮田三郎 (2005) 「現代ギリシア語と日本語における金持ちと貧乏に関する諺の対照研究」
『プロピレア』第 17 号 日本ギリシア語ギリシア文学会 23-32
- 金子武雄 (1983a) 『日本のことわざ 評論』海燕書房
- 温 端政 (2004) 『中国諺語大全』上海辞書出版社
- 北村孝一 (1987) 『世界ことわざ辞典』東京堂出版
- 尚学図書編集 (1981) 『故事俗信諺大辞典』小学館
- 張 一鵬 (2004) 『諺語大典』漢語大辞典出版社
- 田中清一郎 (1979) 『中国の俗諺』白水社
- 竹内靖雄 (1999) 『諺で解く日本人の行動学』東洋経済新報社
- 見坊豪紀等 (1981) 『新明解国語辞典』三省堂
- 呂 青華 (1976) 「日中両国における諺の比較研究：金銭関係を中心に」東呉大学日本研究所修士論文